

## 早期英語教育(小学生を含む)の功罪

井上 貞明

### 小学生「英語スピーチコンテスト」を傍聴して

拙宅の近くに市民会館があるが、ここは筆者の毎日の散策コースの一角に所在しており、毎月さまざまな催し物がある。平成14年3月中旬、例のごとく散策していると、会館入口に「…学舎、第二回英語スピーチコンテスト」という大きな看板が目飛び込んで来た。「…学舎」という名称からして、この大会は私企業主催のコンテストであることは、すぐに察知した。入口で受付の責任者に聞いてみると、案の定、近郊一帯で経営している私企業傘下にある、小学生向けの英語塾のスピーチコンテストであることが判明した。折しも文部科学省は4月より、小学校に英語教育を導入しようとしていたときでもあり、入館して傍聴してみることにした。59名の1年生から6年生までの小学生(うち2名は入学前の児童)による、1分間程度の暗唱文を発表するものであった。

筆者は13年程前から英検の面接委員を委嘱されているが、最近では帰国子女の受験者が増加し、ネイティブスピーカーを思わせる見事な発音にはいつも感心させられる。上記の小学生英語スピーチコンテストでも、帰国子女の英語に勝るとも劣らない美しい発音が聞けるものと期待していたが、ほとんどのスピーカーの発音は、英語特有のそれとはほど遠かったことに、少なからず驚いてしまった。このことは、彼ら小学生に英語を教える側の日本人教師の指導が十分に行き届いていないか、または小学生自身が英語学習にあまり興味がないのにもかかわらず、親が半ば強制的に英語塾に通わせているか、そのどちらかではないかと思われる。

都会はいうに及ばず、地方においても小学生をもつ家庭に、英語を含めたいろいろな教科を教える塾や通信教育の案内、電話が頻繁に来るといふ。親自身が早期教育に関して余程堅実な見識をもっていないと、押し寄せる情報の氾濫の取捨選択ができなく

なり、不本意な教育投資にむだ金を使うことになる。

大修館の『英語教育』(平成10年2月号)誌上で、「早期英語教育と親の意識」という啓発的な論考を拝読したが、その中で親が児童に英語を習わせたい第1の理由として「主に子どもに仲間と一緒に楽しく過ごさせ、何らかの経験を積ませ、外国語に興味を持たせること」を挙げているが、これは建前であって、本音は我が子の英才教育が狙いではないか、と筆者は勘ぐるのである。

早期教育ブームは、まず1970年代に起こり、その火付け役を担ったのは、井深大氏の『幼稚園では遅すぎる』(ごま書房、1971年)という本であるが、この時代は、高等学校への進学率が飛躍的に上昇し、大学進学熱が過熱化し始めたときでもあった。そして今日の少子化の到来とともに、去る4月からの小学校における英語教育の導入が早期教育ブームを再び巻き起こしているのである。かつてルソーはその著『エミール』の中で、子どもたちの発達過程を無視した先取り教育のことを、「不確実な未来のために現在を犠牲にする残酷な教育」と批判した。

時折しも、青少年の凶悪犯罪が激増しており、文部科学省はあの手、この手と教育改革案を打ち出しているが、臨床心理学の第一人者・河合隼雄氏は『20世紀は人間を幸福にしたか』(講談社)の中で「教育改革は親の意識が変わらないと、どんな制度をつくっても難しい。どこの家庭でもいい子の基準はものすごく単純で、ただ勉強ができるというだけの話である」と嘆いている。このことに思いをはせるとき、公教育や塾産業における早期英語教育導入は、石橋をたたいて渡る慎重さが、親は言うまでもなく、教育関係者、行政側にも強く要請されるところである。

### 早期英語教育の難しさ

平成14年4月13日付の読売新聞は「変わり行く

英語教育」という見出しで、千葉県にある成田市立成田小学校を取材している。

同校ではALT(外国語指導助手)の指導の下で、毎日20分ずつ、すべての小学生が英語を学んでいる。生徒は英単語が書かれたかるたを取ったり、高学年は、成田山新勝寺の参道を訪れた外国人観光客に英語で話しかける体験を行ったりしているという。

文部科学省は平成14年7月、国際社会で活躍する人材を育てるため、「英語が使える日本人の育成のための戦略構想」をまとめた。この構想によると、小学校の英語教育に関する専門家の会議を設置して、教科として英語を導入することを検討し、3年後をめどに結論をまとめることにしている。

上記の成田小学校の実践例は文面を読むかぎり成功しているように思われるが、必ずしもそうとは思われない。このことは、外国語教育部で第51回読売教育賞を授賞した、昭和女子大学付属昭和小学校の悪戦苦闘の実践記録を見れば明白である。(平成14年7月22日付読売新聞掲載) 同校で英語指導に従事している小泉清裕先生によると、「小学校高学年になると、歌やゲームなどの英語遊びでは物足りなくなりますが、最初は目を輝かせる小学生が、ほどなく関心を失ってしまう。でも、文例を繰り返すパターン学習では飽きてしまう。子どもの知的好奇心を満足させ、生きた言葉として英語に興味を持たせるには、語られる内容が重要である」という。そこで小泉先生は、ひと夏かけて全学年の全教科の教科書を読み、他の教科の教師から指導方法や児童の様子を聞き、協力を得ながら教材化を進めた。内容がおもしろくても、英語の語彙や文型が難しくは使えない。何年も試行錯誤を繰り返したという。

大津由紀雄・鳥飼久美子氏は『小学校でなぜ英語?』(岩波書店)の中で、「小学校への英語教育導入をその根幹で支えているのは、学校英語教育の目的はコミュニケーション能力の育成にあり、その育成は学習者の年齢が低ければ低いほど効果的である」という議論です。…現状での小学校への英語教育導入は、学習者の将来における英語コミュニケーション能力の育成のために、重大な問題を引き起こす可能性がある」と警鐘を鳴らしている。さらに両氏は「英語話者がALTなどの形で参加する場合も多くあるでしょうが、その場合でも、子どもを取り囲む仲間たちは英語の母語話者ではありませんし、英語の

授業が終わって一步教室の外に出れば、圧倒的に日本語の世界です。それだけ異なった状況下でも、…英語学習を早く始めるほどよいということを裏づける調査結果をわたくしたちは知りません」と批判的な見解を述べている。

日本は島国であり、国際化の時代といっても、英語の授業以外で英語を使うことは、めったにない。筆者が住んでいる千葉市は人口が90万を少し越えるが、日常的に英語を使う人は数えるほどしかいない。小学生のときにせっかく英語を学習しても、日本人が置かれた英語環境を考えると、児童の英語は遅々として進まないであろう。とにかく学習したことを日常的に使って始めて、語学は一步一步前進する。具体的な話をしよう。ヒマラヤの小国ブータンは人口はたった60万人強だが、国語のゾンガ語以外にネパール語など、いくつかの異なる母語を使う人々が共存する。そのせいもあって、授業料無料の学校教育は小学1年生から国語以外のすべての教科を、共通語として英語で教えている。その結果、欧米の大学に留学する学生に言葉の不安はないし、街角や市場で、英語のできない大人と外国人の通訳を堂々とこなす小学生も多い。だれもがコミュニケーションの道具としての英語を使いこなしているという。この小国ブータンの人が日本に来て、「あれほど英語が通じないとは思わなかった。本当に学校で教えているの」と驚いてしまったという。この事実からもわかるように、仕事で英語を使っている人は、日本では極めて少数派である。

世間は「大学生になっても英語が話せない」と責任を英語教師になすりつけるが、先に述べたように日本は島国であり、全国津々浦々、語学的には鎖国状態にあると言っても過言ではない。特別に英語が好きで、自ら積極的に勉強している学生以外は、話せない、聞けないのは当然のことである。

#### 早期教育がもたらす悲劇

A家庭には祖父、両親、長男(小3)と長女(5歳)がいるが、2人の子どもともすでに英語塾に通っており、その他の稽古事にも行っている。この年齢ではまだ親の言いなりになるころである。長女は就学前である。塾の先生に指導されているので、家に帰ると、簡単な挨拶英語で祖父に話しかけてくるという。好奇心の強い年ごろですから、今のところはおもし

るがって英語遊びをしているわけである。

はたしていつまでこの英語学習に対する好奇心が続くであろうか、心配するのは筆者だけではあるまい。日本の親は自分が果たせなかった夢を子どもに託す傾向が強いが、自我が目覚める小学校高学年以降になると、徐々にあるいは突然、子どもは親に対し自己主張する時が来る。そのとき子どもに対してどのように対処すべきか、親の見識が問われるときである。

たとえば次に示す記事は、某教育研究所を特に取り上げた『VIEWS』誌に掲載された1つの事例である。

A子は徹底した早期教育の洗礼を浴びた。母親の教育は胎児のうちから始まり、出生後の部屋には、漢字カードが所狭しとはってあった。2歳から公文を始め、本を読みだした。3歳で方程式を解き、4歳で作文を書いた。小学校2年生ですでに高校3年レベルの算数・数学と国語の教材を終え、話題になった。少女の未来はバラ色である、とだれもが信じて疑うことはなかった。

異変が生じたのは、中学2年になってからである。登校拒否と家庭内暴力が始まり、A子はカウンセラーの手にゆだねられた。かつてはられた優秀児のレッテルは、いつの間にかはがされた。精神のバランスを崩してしまった少女は、結局、高校受験もままならず、その後もうまく立ち直れずにいるというのだ。

もちろん、そのA子の「精神のバランス」が崩れた原因を、単純に早期教育に求めることはできないし、その逆に、早期教育を受ければ必ず「精神のバランス」を崩してしまうという議論が成立するなどと安易に結論づけてはならない。それでもなお早期教育のもつ危うさを決して忘れてはなるまい。

早期教育の問題は、つまるところ子どもたちをどんな人間に育てたいのかという、大人たちがもつ人間観の問題のように思われる。つまり、人間として、人間らしく生きるとはどういうことかという、人間存在の根本の問題が、ここでは問われているのである。

無藤隆氏は『早期教育を考える』の中で次のように陳述している。

早期教育を考える上で最も重要なことは、もちろん、子どもの成長にとってそれがふさわしいかどうかである。ほんの短い時間であれば、格別の苦痛を

与えない限り、ほとんど問題の出ようもないが、日常の生活での子どもの必要(睡眠や食事、運動したり、ものを作ったり、自然と親しんだり、友達と遊んだりすること)を妨げるほどになると問題である。よほどその中身の善し悪しを考えねばならない。

子どもが楽しみ充実しているのかどうか、子どもがその能動性を発揮しているのかどうか。

単にある手段を暗記するのではなく、工夫したり、考えたり、表現したり、ものを作り出したりすることがたっぷりとあるのかどうか。記号操作だけでなく、身体全体を使ってものに触れ、動かすことを十分に行っているのかどうか。動植物に触れたり、友達と一緒に遊べたりするのか。

こういったことが幼児の教育の基でなければならぬ。学校に入ってから心配はもっともだが、その前にこういった基礎を体験していなければ、学校教育の成果も身についたものにならないのである。

かつてルソーはその著『エミール』の中で、最も優れた教育は、と自問し、それは何もしないことであると自答した。教育しようという意識がなくなったときに、最も教育的であるというのが真実であるならば、もともと意図的な営みだといわれてきた教育を、根本から考えなおす必要が起こってくる。このルソーの言葉を、サルトルの『家の馬鹿息子』が証明している。この馬鹿息子とは『ボヴァリー夫人』、『サランポー』、『感情教育』などの作者として有名なフローベール(1821~1880)のことである。このフローベールの実話は極めて感激的な内容ですので、かなり長い引用になるが、教育者である読者のおつきあいを請う次第です。(伊藤隆二著『伸びる個性』より抜粋、PHP文庫)

フローベールはことばもおくれ、学校へ行っても字を書くことが、なかなかできなかった。外科医であった父は、息子が学校では成績が少しもふるわないのを見て、「馬鹿息子」だと考えたのである。事実、フローベールの学業は、遅々として進まなかった。どうにか義務教育だけは終えることができたが、それ以上の進学は何度かアタックを試みたにもかかわらず、成功しなかった。それどころか、かれは学校の試験のたびに発作をおこしたのだ。

父親の嘆きはさらに広がっていった。医者として

後を継がせたいと思っていた父はつきっきりで、勉学の面倒をみたのだが、息子のほうはさっぱりだったからである。18歳のとき、医者になる望みをもてないと知ると、父は今度は、パリで法律の勉強をすることを、息子に強要したのだ。そんなある日、フローベールはヒステリー発作をおこして倒れてしまったのである。ボン・レヴェックへ行くために、兄と馬車を御していたとき、突然、手綱をはなして、兄の足もとにころがっていったのである。23歳のときのことである。

その病気の治療のために、父は勉学の面倒をみることをいっさいやめ、いや将来をあきらめ、あとは放任したままだったという。この放任(じつは、フローベールにとっては、はじめてのいっさいの束縛からの解放であったのだが)によって、フローベールは、はじめてかれ本来の才能を発揮することができたのである。家に閉じこもって、ありとあらゆる文学を読み、夢にふけり、そしてつぎつぎに作品を書いていったのだ。しかも、かれは遅筆ではあったが、1つのことをやりとげる情熱は無類のものであった。代表作『ボヴァリー夫人』は6年、『聖アントワヌの誘惑』は、たびたび想をあらため、文章を練って、決定版ができたのは着手されてから、じつに25年ののちであった。

フローベールの成功は、親の教育の成果なのではなく、それとほうらはらのものだったことに、注目しなければならない。彼の才能発見と、その豊かな発露は、意表をつくものであった。親があの手この手を使って、息子を「できる」子どもにすることを試みたのであるが、それは何の効果も現れなかったばかりか、かえって病気に追い込んでいったのである。

教育は文字どおり、天与の才能を静かに引き出す営みであって、しかもそれは、本人自らなろうとしてなっていくことを温かく支援する営みなのである。

筆者は公立高校の英語教師を28年間勤めた者であるが、30歳代半ばに北海道の千歳高校に勤務していたころの体験談を1つ紹介したい。1年生を担当したクラスの中に、行動が際だって特異な男子生徒がいた。最初の父母面談で、母親が来校し、中学時代の担任から、札幌市にある特殊児童相談所に相談に行くよう言われたという。そこで担任に言われたとおり、息子を相談所に連れて行ったところ、入口にか

けてあった看板を見るなり、とんで帰ってしまったという。確かに学内での行動を観察するかぎり、落ち着きがないし、幼稚な行動が目だった。しかし筆者の英語の授業は熱心に聞き入り見違えるほどの冷静さを見せた。時々鋭い質問をすることもあるし、筆者はすでに、この男子生徒は北海道大学に合格できるだけの才能があることを見抜いていた。当時千歳高校は普通科が7クラスあったが、北大に合格する生徒は皆無に等しかった。筆者はその後登別市の高校に転勤していたが、筆者の目に狂いはなく現役で見事北大に合格していた。ご両親はよほどうれしかったのだろう、約2時間も車を飛ばして、登別市の拙宅まで3人で合格の知らせに駆けつけてくれた。教師冥利に尽きる体験をさせてもらった次第だった。これからの教師は生徒を見抜く直観力が強く求められる。

#### 早期英語教育が必要である理由

次に、早期英語教育を支持する著書の見解を略記する。『小学校英語学習レディゴー』(ぎょうせい、伊藤嘉一編著)は小学校で英語学習が必要な理由として次の4点を挙げている。

1. 英語は国際的コミュニケーションの言語である
2. 英語は国際理解にもっとも役立つ言語である
3. 英語は人間形成に役立つ言語である
4. 児童期は英語学習の適期である

#### おわりに

3兆円ともいわれる日本の英語教育産業、なかでも小学生以下の英語熱が急上昇している。平成14年の4月より小学校で本格的に英語教育が始まったのが主な理由である。

某英会話スクールは平成14年4月から、これまで3歳だった入学最低年齢を下げ、2歳3か月からのコースを始めているという。同スクールの開発・推進部の話によると、少し前までは、幼稚園から英会話だったが、今やその前から新規入学者の主流になっているという。良識ある親も「お受験」の主流に逆らうことはできないのであろう。

(元 東京情報大学教授)